

バブルは登山の再生を助けるか？

OWCC 中川和道 20201118

ソーシャル・バブル¹⁾という言葉をご存じだろうか？人類は過去に何世紀も、特効薬もワクチンもない状況の中で感染症に対抗してきた。その中で編み出した小さなグループ(固い結束の『となり組』パンデミック版か?)を、バブルというのだそうだ。その効果を学術雑誌ネイチャー6月号がコンピューターシミュレーションで検証し、相応の成果を見出した。5月頃からMITテクノロジーレビューなど^{2,3)}が何度も取上げてきた。至近の例は、農水省の4人会食指針⁴⁾だ。そのソーシャル・バブルの理論を、登山活動に応用しようと考えた人々がいる。本人にはお尋ねしていないのだが、大城和恵先生の10月31日講演⁵⁾は、その例のひとつではなかったか？

中川の自己解釈で内容をまとめる。(0)最も身近な行動単位は家族だ。だからコロナ自粛が明けた後に「登山の再開は家族単位から」と言われた。今回の行動単位はもう一歩進んで、STEP2の「新しい少人数グループ」である。これを中川は勝手に「山行バブル」とここでは呼ぼう。大城先生のルール⁵⁾を(間違っているかも?)適用すると、(1)バブルの人数は4名で固定する、(2)同じ会などすでにつながりがあること、(3)講習会などの場合は、室内実技や座学などと山行を同じメンバーとする、(4)この行動単位の中でのみ資材装備を共有する、(5)複数のバブルが同時に登山することは可能だが、バブル間の交流や資材装備の共有は行わない、(6)緊急時(身体生命に危険が及ぶ場合)には適切な感染防止対策をとったうえで、バブルどうしの支援を許容し得る、(7)単位メンバーを変更する場合は、最後の山行から2週間経過後に行う。さてこれを我々にどう具体化していこうか？

(a)ピークハント・縦走・一般登山の場合、4名は妥当な数だ。(b)クライミングではどうかと考えた中川の場合は「3名バブル」だ。(c)大きなパーティーや登山学校はバブル1、バブル2、バブル3などの合同パーティーで作る。さらに上記(1)~(6)の考え方を適用すれば、一応の形式は整う。

以上が中川の勝手に聞き取りである。さらに考えてみよう。農水省の会食指針が「4人」という理由は、罹患確率が下がるからだけではない。大城先生の10/31講演では違った表現だったが、「感染経路の追跡の正確さを上げるため」である。すなわち、今や、誰もが感染するのだ。山岳事故と一緒に、まさしく「明日は我が身」だ。自分が感染したら直ちに経路調査に協力し、抑え込む準備を、バブルによって登山界全体が共有しようね、と言っているように中川は思う。

「3名バブル」の仲間は、きちんと体温を測り体調を管理しよう。もし事故を起こしたら、救助隊の方に「平熱は36℃です。コロナの症状はこの6日間ありません」とはっきり言えるのが、withコロナ時代の登山ではなかろうか。体温の管理などをしない人が、もし、いたら、その人には「ザイルを組みたくない」と中川は言おう。体調の自己管理を前提とした登山をやりたいのだが、いかがだろうか。

¹⁾MITテクノロジーレビュー、「社会復帰への第一歩「バブル生活」」、2020.05.25。

²⁾MITテクノロジーレビュー、「社会的バブル」戦略、2020.06.28。

³⁾Forbes ソーシャルバブル大事に、2020.09.13。

⁴⁾井戸知事「GoTo 4人に」、神戸新聞 2020.11.17。

⁵⁾大城和恵「登山の新型コロナウイルス感染防止対策」、登山研安全登山サテライトセミナー(兵庫)、2020年10月31日-11月1日。